

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

どのくらい成長していればいいのか？

「未熟児、未熟児」とよく言われるが、早産で産まれ、この世で生命を維持し、成長できるのは最低限妊娠何週目なんだろうか。その最小体重はいったいどのくらいか。私がまだ医学生だった頃「一九四〇年代」とはだいぶん違ってきているようだ。その頃、妊娠六ヶ月未満の赤ん坊が生きていく事が出来た例はいくつかあったが、稀な事であった。

研修医として働き始めて間もない頃、私はその稀なケースを経験した。体重わずか千二百グラムのその子がすくすくと成長した事は素晴らしい勝利の記憶として私の心に残っている。

その赤ん坊は今では素晴らしい女性に成長し、立派な母親になっているが、その頃では全く珍しいケースだったのだ。しかし最近では私も産婦人科医として、子どもを取り上げる事もなくなった。執筆活動や講義や又各地に出張旅行したりでたいへん忙しく、以前のように病院の育児室に度々訪れる暇もないくらいである。

いちばん最近大学病院を訪れたのは昨年である。その時、病院には二人の未熟児がいた。男の子と女の子で二人とも母親の最後の月経から数えてきっかり24週目に産まれたのだった。つまり約五ヶ月半の計

算になる。二人ともそれはそれは小さかった。私は看護婦が二人の血圧を計るのを眺めていたが、諸君がもしその場にいたならさぞかし驚かれたに違いない。その片腕の全長は私の人差し指と全く同じ長さで、しかも周りは私の指より細かった。看護婦は小さな血圧帯をその細い腕に巻き、小さく切ったテープで止めていた。そうしなればうまく血圧が計れないのだ。彼ら二人は精巧な保育器に入れられて、生命を維持されていた。私は驚きを覚え、心の中で彼らのために祈りました。それから三ヶ月ほど後、病院に立ち寄って、担当医に彼

らのその後を尋ねてみた。担当医は笑ってこう言った。「二人ともすくすく育ってもう両方の家庭に帰りましたよ。」この言葉を聞いて、他人事ながら嬉しかった。しかし一方心の中で少し悲しい気もしていた。無事退院して行ったその二人の赤ん坊と同じ月齢かもっと月齢のいた子供や又、同じくらいの子供達か、一方では中絶のため、毎日毎日、その命をたたれている事を知りすぎるほど知っていたから。

J・Cウィルキー

医学博士

解決策としての

避妊と中絶

今の社会は、若い女の子たちが性交渉を求められる場合には避妊を、そして妊娠した場合には中絶を解決策としている。両方も、女の子にとっては心理的にも身体的にも危険なものである。避妊と中絶は十代の不本意の妊娠を防ぐといわれている。しかし、実際は全く反対の結果が出ている。避妊と中絶がよく普通に行われているところでは、十代の妊娠率は上昇しているのである。

環境に影響され、相手となる男の子や雰囲気の影響されるものであり、自身自身を性交渉に積極的な女の子だとは思わない。避妊のために医者に相談するということは、性交渉をする決めてはいるよくなものである。これは、若い女の子の自分に対する見方に変化をおこすことになる。「私はもう『良い女の子』でもなんでもないので」と。

避妊が失敗に終わらざるを得ない二番目の理由はもっとよく知られているところであるが、しばしば妊娠した女の子はその妊娠に対して、隠された、無意識的な理由というものを持っている。最初はその理由には気付いていないが、カウンセリングの後でしばしばそれに気がつき、「妊娠は望んでいたことであって、自分にとって一つの目標を達成する方法なんだ。」と述べる。最も一

般的な無意識的理由には次のようなものがある。

【1】自分自身のイメージが非常にあやふやなこと。彼女のアイデンティティが不確かなため、男の子との関係を保つ唯一の方法は性関係を結ぶことだと思いつく。さらに、もしその関係が不安定なものとき、彼の子供を生んだら関係が保てると思うのであろう。

【2】誰かを愛し愛されたという強い欲求によるもの。自分の子供がこの二つの欲求を満たしてくれるだろうと幻想する。

【3】両親に対する憎悪によるもの。若い女の子が親に怒りや憎しみを押さえつけられていたときによくみられる。彼女は、妊娠するといういわば消極的な方法

で両親に抵抗する。要するに妊娠してしまう女の子は二つに分類できる。

(a) ある問題を解決するために妊娠したい人。

(b) 自分を性的に成熟した女性だと思わない人。

このどちらの場合でも避妊というのは何の解決策にもならない。

では、中絶はどうだろうか。生まれて来るべき子供の生命を絶つ中絶という行為そのものの明らか問題点とは別に、女の子自身にとっても問題がある。

中絶は否定的な解決法である。罪悪感なしで中絶を受けるように勧められた女の子はしばしば温かい、親密な人間関係からは遠のき、自己防衛のために心理的に無感覚になっていく傾向がある。中絶は子供との、責任をとらなくなった愛の相互関係を目指していることをあらわすものではないことは確かである。子供を生み、愛情を示すこと、それはそのまま自分で子供を育てるにしろ、養子に出すという辛い決心をするにしろ、赤ん坊にとっても母親にとってもより良いことである。社会は、若い人々に婚前交渉と中絶が与える影響を省みることなくそれらに導いている。避妊法と中絶を、愛に満ちた支えと導きの代わりに提供してしまっている。私達は知らず知らずのうちに、人と深く、親密な末永い関係を結ぶことのできない世代をつくり出してしまっている。

レイプで

生まれた生命

ある晩の10時頃、16才の少女ケイさんが帰宅途中、暗い、トンネルのようなガード下にさしかかった。半分ほど行って、入り口と出口の両側のライトが消えているのに気付いた。すると、突然すばやく何物かがケイさんに襲いかかって、地面に押し倒し、「俺はナイフを持っている。もし声を出したら命はないぞ。」と言いました。

彼女はレイプされ、暗闇に置き去られたが、どうにか家に帰って、空しく引きちぎられた衣服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びながら、自分がこの上なく汚らわしく不潔に思えた。そして、「二、三週間後嘔吐し始めました。」

一九五七年に合衆国では法律上中絶が禁止と

なったので、ケイさんには身ごもった子どもを中絶する道もありませんでした。彼女は女の子を出産し、ロビンと名付け、母親として愛していたけれど、彼女の年で子どもを育て上げるのは無理でした。ケイさんの母親は夜働き、ケイさんは昼間働いて、交替でロビンの面倒を見ていたけれど、母親が神経衰弱で倒れたとき、ロビンを仕方なく養護施設に入れました。一九八五年、母子が再び一緒に暮らせるようになった時、「お母さん、中絶なんかしないで私を生んでくれてどんなにうれしいかわからないわ。」とロビンは母親に言いました。

今、ケイさんは七千人以上の性的暴行を受けた男性、女性を無料でカウンセリングしてきた心理学者です。彼女がカウンセリングした人で、最年少者が3才で、最年長者が79才の老

人でした。一九八五年、ケイさんは今まで扱ったカウンセリングの例をたずさえて、公共の場で報告をしました。そして翌年「レイプで生まれた命を守る会」(LALU)を設立したので、トーク・ショーに出演したり、新聞や雑誌のトピックに取り上げられました。39才でクリスチャンになったケイさんは精神的障害が癒えるには何年もの年月が必要なる事を認識せざるを得なかった。

一日に三百通もの手紙が彼女宛に届くようになり、遠くはオーストラリアから届くのもありました。彼女はその一つ一つに丁寧に返事を書いていきま

した。ケイさんが相談者に最初に行う事は、救世主であり、あらゆる傷の治療者としてのキリストの存在を教え、次に、加害者をも許しなさいという事だった。そして、最後に必ず善

の実行者、隣人を助ける者なれ」と教えるのでした。性的暴行の結果、女性が妊娠してしまったとしたら、唯一良かった事は子どもが授かった事だと考えねばならないとケイさんは言います。彼女がカウンセリングした女性で中絶する者が一人もいないというのは彼女のこの教えによるものでしょう。こうして、子どもを産むに至った女性達の中に、養子縁組みをする場合もいくつかあるけれど、殆ど自分の手元で子どもを育てています。最初の中絶を考えていたのに、今ではケイさんのようにカウンセラーとして相談者たちに子どもを産むようにすすめている人すらいます。

「人間の誤った行動は神様のせいではなく、どのよ

愛する人がレイプや近親相姦によって産まれてきたと想像して下さい。その人への愛情が少しでも冷めたりするものでしょうか。レイプや近親相姦などの場合はと言って中絶に賛成する政治家は皆こうして既に生まれた人達の横面を張っているのと同じなんです。」

長いことケイさんは、自らをレイプの被害者であると世間に公表してきました。今日、彼女はこう教えています。中絶は罪深いことですが、レイプされることは何の罪でもありません。レイプはおぞましい行為ですが、生まれる子供は美しい者です。

貴重な財産

ローマ法王はプロ・ライフの運動をしている人達に次のように言われた。

「全ての生命は貴重な財産である。人々が全ての人間の生命の偉大さに気付くように思い起こさせて下さい。」

以下は教皇から私達へのメッセージの要約です。

「私はあなた方の情熱と実行力、そして寛大さに感謝いたします。あなた方は精神的価値から来る強さを持っていきます。又、イデオロギーの条件や官僚支配の重圧に関係なく、行動できる機敏な人達です。胎児を救う意義そのものがあるあなた方を強く寛大にするのです。あなた方は、自身を人間の生命、全ての生命に捧げているのです。たとえ生命がまだ胎内の神秘のベールに隠されて

いたとしても…。これらの理念は全ての人の心に響き、その響きは強く働き、人間の生命への敬意は現実のものとなるでしょう。心の奥深くで愛と公正さの必要を強く感じているあなた方に私は希望を抱いています。それらを必要とする事があなた方を生命への敬意に導きます。その生命は一番最初から受け入れられ、愛され、本当に人間のあらゆる環境の中でいつでも慈しまれるべきなのです。」

RTLAN(S>W)1/94